357
115

大須賀乙字選

# 碧梧桐句集

東京　俳書堂藏版

大正
5. 2. 3
内交

## 序

我國にはもと傑れたる敍景詩はなかつたのである。芭蕉は抒情詩人たる素質の人であるが、十七字に客觀的內容を取つて僅少の名句を得たのである。蕪村は芭蕉の完成したるものに憑つて俳句を純然たる敍景詩にしたのである。蕪村の敍景は、しかしまだ概念的なところがあつて、現在の感覺に觸れた生々としたものではない。子規の寫生になつて初めて客觀的具象化を遂げたのである。しかし子規の寫生は部分的感覺に執してはゐない、纏つた氣分を把握して天然に向つて居る。理智的按排の巧妙な藝術を築き上げて居るのである。子規の進んだ跡を最も正

直に歩つて行つた者は碧梧桐である。感覚の鋭敏さに於ては碧梧桐は稀有の人である。子規の判断は純理智の働に近いものであつたけれど、碧梧桐の判断は感覚的要素が基礎となつて居たから、子規の感化が薄らげば危険であるべき將來を持つて居たのである。此句集を讀めば誰れでも「ものの感じを掴む驚く可き鋭敏さ」に感服しないものはなからう。藝術の爲めの藝術として の俳句は子規碧梧桐に至つて完成されたといつてもよいのである。子規にも模倣句は可なりあるが、碧梧桐にもそれが少くない。しかもよい調子にこなされて居るから、なか〳〵氣のつく人はないのである。調子のうまいことも碧梧桐の特色に數へな





ければならぬ。文泉子は「碧梧桐は調子の天才だ」といつた。音調も感覚的要素であるから碧梧桐の立場がそこにある事は愈〻明かである。碧梧桐の句といへば拮据難解のやうに世間では思つて居るが、決してさうでないことは此句集が證する。初期の句は、どうしても概念的であるを免れないが、歴史的に位置を占めて居る句として掲げて置いた。佳句は明治三十八九年頃より四十一年頃までのものに多い。殊に東北行脚中のものには、なかなかの絶唱がある。

一度新傾向の聲に驚いてからの碧梧桐は、局分されたる感覚に瞑想を加へて横道に外れて了つた。さすがに行脚をして居る

から實境の見る可き句もあるけれど、四十三年以後になると、殆ど拾ふ可き句がない。俳人碧梧桐を再び見ることは出來ないと思ふ。信に惜しいことである。其故にこれは序文にして又弔文である。

大正四年十二月五日

於千駄谷寓居　乙字識





## 凡例

一、本集は「新俳句」「春夏秋冬」「ホト、ギス」「日本新聞切抜帳」「續春夏秋冬」「蚊遣草」「日本俳句鈔」「新傾向句集」等に材料を採る。

一、「新俳句」より採錄せる句は歴史的價値をも較量したるなり。

一、新傾向と言はれたるもの前半は可、後半は不可、全く其質を異にす。明治四十二年以後のものは僅に兩三句を選ぶ。

一、多作の人の面目は窺ひ易からず。其人の眞價を發揚し併せて其時代の特色を見ひとせば、一に選者の一種創作的技能に俟たざる可らず。本集編纂は余の評論の一部也。

一、本集編纂には原石鼎君の助力を得たり深く同君に謝す。

大正四年十二月九日　選者識



# 碧梧桐句集目次

## 春

### 時候


春浅……一
春寒……一
冴返る……二
暖か……二
麗……三
永日……三
春夕……四
朧……四
暮春……四
夏近し……五


### 天文

初雷……六　春雨……八　春月……一〇
霞……六　東風……八
春雪……七　春風……八

## 地理

雪解……一　春の山……一三　春田……一四
殘雪……一　春の水……一三　苗代……一五
別霜……一　春の潮……一三
水温む……三　野山燒……一四

## 人事

鑁……一六　一爐塞……一六　一火燵塞……一七





畑打……一七　草餅……一九　お身拭……二一
凧……一七　二日灸……一九　接木……二一
野遊……一八　藪入……二〇　種井……二一
踏青……一八　出代……二〇　木實植う……二三
汐干……一八　薪能……二〇

## 動物

鶯……二三　雉子……二五　柳蟶……二六
歸雁……二三　呼子鳥……二五　田螺……二六
雲雀……二三　囀……二六　蜆……二七
燕……二四　小鮎……二六　蜂……二七

蝶……二七
蛙……二八
虹……二八
蠶……二八


## 植物


梅……三〇
櫻……三一
菜の花……三五
菫……三五
蘆の角……三六
杉菜……三六
蕎……三六
馬酔木花……三六
名草芽……三七
芒芽……三七
桃……三七
李……三八
椿……三八
蹴蹋……三九
辛夷……四〇
松の緑……四〇
柳……四〇
木の芽……四一
藤……四一
山吹……四一
虎杖……四一







海苔……四一


# 夏

## 時候


短夜……四三
明易……四三
涼し……四四
五月……四四
六月……四四
旱……四五
土用……四五
秋近……四五


## 天文


五月雨……四六
夕立……四六
薫風……四七
雷……四八
雲の峰……四八
日盛……四九

夏の月……五〇　一黄雀風……五〇　一

## 地理

清水……五一　一夏野……五一　一夏山……五一

## 人事

松前渡り……五三　粽……五四　競渡……五六
衣更……五三　蘭湯……五五　單物……五六
袷……五四　菖蒲草摘……五五　夏羽織……五七
祭……五四　玉……五五　梅干……五七
御祓……五四　夏断……五五　青簾……五七
幟……五四　團扇……五六　蚊遣……五七





打水……五八　日傘……六〇　沖膾……六二
納涼……五八　蟲干……六一　鮓……六二
抱籠……五九　蚤蝨……六一　心太……六四
瀧殿……五九　鵜飼……六二　水飯……六四
雨乞……六〇　狩川……六二　干飯……六四
夏痩……六〇　避暑……六二
掛香……六〇　削氷……六三

## 動物

時鳥……六五　行々子……六六　啄木鳥……六七
閑古鳥……六五　水鶏……六七　蝙蝠……六七

金魚……六七
蛇の衣……六八
蟬……六八
蚊……六九
蜘の子……六九
灯取蟲……六九
螢……七〇
蟇……七〇
水馬……七一
蛭……七一
子子……七一

## 植物

桐の花……七三
槐の花……七三
合歡花……七三
栗の花……七三
若葉……七四
卯の花……七五
夏木立……七五
木下闇……七六
柳……七六
松落葉……七六
菖蒲……七七
楝の花……七七
牡丹……七七
芥子の花……七八
百合……七八





夕顔……七八
撫子……七九
蓮……七九
茨……八〇
河骨……八〇
苔の花……八〇
蕁……八〇
蕗……八一
夏草……八一
麥秋……八一
南瓜……八二
瓜……八二
藥……八三
いちご……八三
夏大根……八三

## 雜

## 秋

### 時候

立秋……八五　秋晴……八七
朝寒……八五　夜寒……八八
うそ寒……八六　夜長……九〇
肌寒……八六　秋暮……九一
冷か……八六　秋の夜……九一

## 天文

初嵐……九三　秋雨……九六
秋風……九三　稲妻……九七
野分……九四　天の川……九八
星月夜……九五　月……九八
秋夕……九一　後の月……一〇一
暮秋……九一　三日月……一〇一
冬近……九二　霧……一〇二
九月盡……九二　露……一〇四





秋の雲……一〇六

## 地理

秋の山……一〇七　花野……一〇八
秋の水……一〇七　初汐……一〇八

## 人事

去來忌……一〇九　大文字……一一〇
子規忌……一〇九　三井詣……一一一
踊……一〇九　行水名殘……一一一
燈籠……一〇九　新酒……一一一
墓參……一一〇　濁酒……一一三
柚味噌……一一三　澀搗……一一三
新蕎麥……一一三　砧……一一四
角力……一一五

花火……一二五　案山子……一二八　漆掻……一三〇
秋扇……一二六　鳴子……一二八　崩築……一三一
捨團扇……一二六　添水……一二九　天長節……一三二
新綿……一二六　初獵……一二九　新米……一三三
大根蒔……一二七　海贏打……一三〇　高きに上る……一三三
秋の蜩……一二七　鹿笛……一三〇　猿酒……一三三

## 動物

鹿……一二三　啄木鳥……一二七　百舌鳥……一二七
雁……一二四　鶉……一二七　燕歸る……一二七
渡鳥……一二五　鳴……一二七　鰯……一二九





鯉……一二九　鮭……一三一　蟲……一三五
鰡……一三〇　鯛……一三一　秋の蚊……一三六
蓑蟲……一三〇　蜻蛉……一三一　鯊釣……一三六
蚯蚓鳴……一三一　赤蜻蛉……一三四　鮠……一三六
落鮎……一三一　蟷螂……一三四　雀蛤となる……一三七

## 植物

木犀……一三八　柳散る……一四三　柚……一四五
紅葉……一三八　梨……一四四　栗……一四五
柿紅葉……一四一　銀杏……一四四　栗……一四七
草紅葉……一四二　柿……一四四　唐黍……一四七

栴檀の實……一四七
木の實……一四七
木槿……一四八
芭蕉……一四九
鷄頭……一五〇
芙蓉……一五〇
菊……一五一
萩……一五二
朝顔……一五三
桔梗……一五四
曼珠沙華……一五四
稗……一五五
芒……一五五
女郎花……一五八
野菊……一五八
雁來紅……一五九
蘭……一五九
柘榴……一五九
烏瓜……一六〇
蘆の花……一六〇
蕎麥花……一六一
末枯……一六一
芋……一六三
唐辛子……一六四
瓢……一六四
糸瓜……一六四
掛煙草……一六五
黍……一六五
稻……一六五
落穗……一六六







草花……一六六
月草……一六六
鳳仙花……一六七
蓼花……一六七
菌……一六七


## 雜

## 冬

### 時候


立冬……一七一
小春……一七一
冬の夜……一七二
短日……一七三
寒さ……一七三
冬ざれ……一七六
寒の入……一七六
師走……一七七
年の暮……一七七

春隣……一七八
時雨……一七九
雪……一七九
霰……一八四
霜……一八五

## 天文

霙……一八六
冬日……一八六
風……一八七
冬空……一八七
北風……一八八
冬の月……一八八
寒の雨……一八九

## 地理

枯野……一九〇
冬枯……一九一
冬山……一九一
氷……一九二
冬川……一九三
冬田……一九三
冬海……一九四





## 人事

神の旅……一九五
吹鞴祭……一九五
臘八……一九五
冬構……一九五
雪圍……一九六
冬籠……一九六
避寒……一九七
火鉢……一九七
爐開……一九八
火燵……一九八
懐爐……一九九
圍爐裏……一九九
榾……二〇〇
炭……二〇一
蒲團……二〇二
足袋……二〇三
毛布……二〇三
綿入……二〇四
紙子……二〇四
獵……二〇四
阪鳥……二〇五
網代……二〇五
柴漬……二〇六
風邪……二〇六
煮凝……二〇六
納豆……二〇六
蕎麥湯……二〇七

野施行……二〇七
寒紅……二〇七
水洟……二〇七
ひゞ……二〇七
寒稽古……二〇八
卵酒……二〇八
煤掃……二〇八
古暦……二〇九
餅搗……二〇九
姥等……二〇九
大原雜魚寝……二一〇

## 動物

千鳥……二一一
水鳥……二一一
鴨……二一三
鷦鷯……二一三
冬の雁……二一三
鷹……二一四
鯨……二一四
河豚……二一四
生海鼠……二一四
牡蠣……二一五

## 植物





山茶花……二一六
茶の花……二一六
返り花……二一七
落葉……二一八
紅葉散……二一八
冬木立……二一九
枯柳……二二〇
水仙……二二一
枯菊……二二一
蕪……二二一
葱……二二二
冬牡丹……二二二
冬薔薇……二二三
枯蘆……二二三
草枯……二二三
枯木……二二四
枯茨……二二四
干菜……二二五

## 新年

## 時候

元日……二二六

天文
初日……三六一
人事
蓬莱……三七一
動物
初鶏……三七一
嫁が君……三七一

碧梧桐句集目次終



# 碧梧桐句集

大須賀乙字編

## 春

### 時候

春浅き水を渉るや鷺一つ

春浅き春なり天王寺

西門の浅き春なり天王寺

春寒し水田の上の根なし雲

水餅や餘寒の水に殘りある ✓

春寒き宵の焚火にあたりけり ✓

汐落ちて貝掘りそむる春寒き

冴返る

鶴の羽や白きが上に冴え返る ✓

流氷のいつ戻りけん冴え返る

暖か

暖き乘合舟や菅の笠 ✓





麗

雲うらゝ敷浪を又砂子かな

わしが城と川舟唄もうらゝかに

日永

天領の銃音慣れて日永かな

蜜とれば鶏も戻りて遲日かな

永き日や羽惜む鷹の嘴使ひ

永き日の阿音敎ふる啞生かな

砂が森の灣には木材を積む巨船見ゆ

海に浸る槍の匂ふ遲日かな

嵯峨半日

法話より詩話の遲日や把栗寺

春夕

地震知らぬ春の夕の假寢かな

吉野紀行

朧

五十町上れば灯す朧かな

暮春

德本に問ふ草のある暮の春





行春やウシをはごくむ蟻の業

夏近し

夏近き犬の病もおそろしき

## 天文

初雷

裏山に初雷の雲かゝりけり

初雷やふるふが如き雛の壇

初雷のごろ〳〵と二度鳴りしかな

吾旅も南さす日や初雷す

霞

境に入つて國の禮とふ霞かな

大津繪やかすむ湖水の七小町

鷹が鳴く峠を越すや晝霞





葛城も丸き山なる霞かな

庭木など寄進を思ふ晝霞

大なる港に作る霞かな

熊の來て牛鬪ひし霞かな

道山沿ひとなりて足下に平館海峽を見る

風立てば霞の奥も波白し

山霞む山にも運河記念林

春雪

淡雪や蠶神祭の幟立つ

母衣を引く馬の稽古や春の雪

春雨

春雨や諸國荷船の苫の數

種馬につけにやりけり春の雨

杉苗を積む舟ばかり春の雨

東風

荷かさむ問屋主や東風心

春風

門を出て五六歩あるく春の風





春風の吹いて居るなり飴細工

公園の借馬に乘るや春の風

馬の市馬の子も來る春の風

カナリヤの夫婦心や春の風

春風の乞食芝居も鬣かな

春風や西鶴は行く女護島

虎の威を奴が髯や春の風

汐汲みに戀語るらん春の風

奉公を僧介添や春の風

春月　柳もなし籬の上に春の月

曲すみし笛の餘音や春の月

五六騎のゆたりと乘りぬ春の月

春月や上加茂川の橋一つ





## 地理

雪解　磯山の日ら〻かな雪解かな

一番の渡り漁師や雪解風

殘雪　殘る雪鶴郊外に下りて居り

爐滓捨てし裏も見るなり殘る雪

別霜　別れ霜葉牡丹の青き葱の黄なる

掛け昆布や霜の名殘の三棹程

根ッ子焼く烟絶えずよ春の霜
春霜や接臺植うる密柑山

水温む

釣半日流るゝ煤や温む水
井戸水に蟻(イカツ)みえそめ温みけり
貝を生けし筏沈めしが水ぬるむ

春の山

大佛を寫眞に取るや春の山
道となく牧車通へり春の山



春の水

上京や友禪洗ふ春の水
木屋町や裏を流るゝ春の水
蛇穴を出でゝ石垣の春の水
遡りて君を迎へぬ春の水
春の水古柴網にかゝりけり
構へたる並松もあり春の水

春の潮

ひた〳〵と春の潮打つ鳥居かな

野山燒

道芝のくすぶつて居る燒野かな

山燒きに出て夜雉を逐ふくらさかな

山燒けば狐のすなる飛火かな

燒野來し川風に乘る渡かな

蝦夷に渡る蝦夷山も亦た燒くる夜に

春田

首洗井の森や春田を落つる水





苗代

風垣を結ひそふ磯田苗代かな

## 人事

嵯峨半日

把栗寺の涅槃も雛も同座かな

紙礫打たれん雛が下座にゐて

### 雛

### 爐塞

爐畳のはみいづる藁を佗びにけり

三つの爐の榾爐はいつか焚ずなりぬ

驛鈴をしばきく日なり爐塞ぎぬ





### 火燵塞

午過の火燵塞ぎぬ夫の留守✓

### 畑打

畑打の四五人よりし畫餉かな✓

牛繋ぐ並松あるや畑打

兵村の歌うたひけり畑打

### 凧

吹きつれて南になびく凧✓

ちさい子の走りてあがる凧✓

凧百間の絲を上りけり✓

船卸しせし旗の上や凧の數
牧場の柵に上るも凧場かな

野遊　野に遊ぶ歌に行人唱和かな

踏青　芳しき芝なだらかに踏み辷る
いち遲き船も卸しぬ青を踏む

汐干　四五本の棒杭殘る汐干かな





少し汐干く汐干の人だかり
汐干して色焦したる女かな ✓
人を見て蟹逃足の汐干かな ✓

草餅　餅蓬も雪交り摘みし首途かな

二日灸　馬で來て灸師だのみや二日灸 ✓
腕白を裸にむきぬ二日灸 ✓
兩肩の富士と淺間や二日灸 ✓

二日灸木辻の君もすゑに來る✓

藪入　藪入のさびしく戻る小道かな

出代　出代の下女あはれなる荷物かな

出代にいひかはしたる文もなし

薪能　脇僧の寒げに暗し薪能✓

薪能小面映る片明り✓

薪能の果てるや薪盡きる頃✓

笛方のかくれ貌なり薪能✓

お身拭　花を見てお身拭見ぬ恨かな

接木　はびこりし李切りすて接木かな✓

種井　槻大樹ある一郷の種井かな

木實植う　説林の書に見て木の實植ゑにけり

木の實植ゑてみまかりし人の後圖かな



## 動物

鶯　谷の雪鶯わたるあちこちと

鶯や峽の戸なりし飛岩に

歸雁　大風の凪ぎし夜鳴くは歸雁かな

焚火すれば舟待つらしも歸る雁

雲雀　籠の中に粟くひこぼし鳴く雲雀

大澤の廣澤の水や鳴く雲雀

牧場にせよと野に鳴く雲雀かな

雲雀の句野に住む人の所望かな

埒越えて飛ぶ馬もあり鳴く雲雀

燕

燕や矢橋の舟は今出でし〻

燕の古巣を見るや智恩院〻

山焼く夜巣に何を鳴く燕かな

九條まで町の木立や飛ぶ燕

噴火口に奇しと見る岩燕かな





岩燕鳴く霧晴れの虹見えて

雉子

難所なる螺螺上りや雉の聲

奇瑞なる白雉の年の大赦かな

雪も處々樺の枝鳴りを立つ雉か

軍用に石取りぬ荒墟鳴く雉子

呼子鳥

呼子鳥まだ聞えずよアイノ臺

囀　囀や子安地藏の高い木に
　　囀や椰の熊野に桃李園

小鮎　朝曇隈なく晴れぬ小鮎釣

柳鮠　殊に一樹覆ふ森の池や柳鮠
　　家鴨遊ぶ湖落口や柳鮠

田螺　樋の口や田螺とぼしき水溜り

田螺鳴く二條御門の裏手かな

蜆　口あいて居れば釣らるゝ蜆かな✓
　　水買うて分つ蜆や隣同士

蜂　隣から藥草くれぬ蜂の毒✓
　　あらすごの熊蜂に追はれ逃にげり✓

螺　陣營を進めし跡に螺々かな

高潮の夏めく風に蝶々かな。

蛙

手習によき繪出來しぬ鳴く蛙
洗足は雨溜め水か鳴く蛙

虹

虹と蜂の花に日暮るゝ別れかな✓

蠶

蓆分けて蠶淋しくなりにけり✓
○蠶鍬たる父も在して蠶時✓





夕暮のほの暗くなりて蠶棚✓
桑摘の山も越え行く蠶飼かな✓
追々に桑乏しくて蠶飼かな✓
蠶室の多摩川見えて霞かな✓
渡り蠶の白玉分つ莚かな。

## 植物

### 梅

長池や梅に茶翁のたゝ老いぬ

古き梅　古き柳や小六條

棕梠の葉に枇杷の葉に梅の落花かな

梅林に入る麥の間の小徑かな

梅折つてかつ散る花や眉の上✓

六花召集せらる

僧籍の軍籍の人や梅の花

四隣より掘り捨つる藪や梅見えて





月ノ瀬梅林にて

蟹の食みし山葵と見する梅の宿

### 櫻

ふたかゝえ三抱えの櫻ばかりなり

三味線や櫻月夜の小料理屋✓

花に酒居つゞけの愚や二日酔✓

吉野紀行十六句

立札も門も櫻も蝕みぬ

修覆時落花の中の瓦かな

朝日さす杉間の花を數へけり

初瀨法師花の木間より見えにけり

十三塔花七めぐり廻らせる

花屑もかゝる隈なき大河かな

檜磨ぐ流れも花の籠かな

檜磨ぐ里人花に背きけり

女ども峠こす日や花曇

棕梠高く見ゆ千本の花の雲

鷹鳴いて落花の風となりにけり





庭踏むや落花をさそふ通り雨

院の花軒の玉水流れけり

幕濡れて夕しづまる落花かな

花籠に花すくひ入れて歸るなり

尼もゐて鮓を開くや山櫻

嵯峨半日六句

足もとの花眉の邊のつゝじかな

田樂

花に近く豆腐を搾る雫かな

曾遊の月眼前の櫻かな

把栗寺や花散りかゝる藪表

花一木ありて貧しや把栗寺

落柿舍や花の流れの一またげ

某子の羽織に書す

幕かへすやうに落花をふるひけり

鶯子を訪ふ

花なしとも君病めりとも知らで來し

熊野川卽事一句





過ぐる舟と言かはす炭山の花

寂光院

法皇の御幸になりし櫻かな

菜の花

菜の花に汐さし上る小川かな

菜の花や馬車をこぞりて下る人

海明りして菜の花に行く夜かな

菫

田の畦の菫咲きけり初瀨道

蘆の角　蘆の芽や汐通ふ湖の一つ岩

杉菜　御微行の沓を沒する杉菜かな

薺　庵を出で、道の細さよ花薺✓

馬酔木花　○樒かとまがふ山路の馬酔木かな

腹落ちし鹿淋しさやあせぼ咲く





名草芽　うら若き萩の芽のびぬ一二寸✓

忘れ居し葱を見れば芽生かな

芒芽　草の中や一かたまりの芒の芽✓

桃　桃さくや湖水のへりの十箇村

旅にして畫餉の酒や桃の花✓

野の家の桃に垣して隣同志✓

室町や緋桃咲いたる古き家✓

某妓の三弦に題す

散り布きし桃の上に雨の音あらん

李

畑中に三輪の染屋の李かな

椿

赤い椿白い椿と落ちにけり

椿落ちて鶯啄む流れかな

山椿高々とある峠かな





貸家に厩あるなり落椿

躑躅

躑躅山茶店出したる村の者

黒谷の裏門はいるつゝじかな✓

躑躅白き小庭も見えて加茂の家✓

再興の施主たのみあるつゝじかな

猿紹に枯れけん樹々や山躑躅

山にある垢離場の水やむら躑躅

關守の活けたる赤城つゝじかな

岩を割く樹もある宮居躑躅かな

辛夷　律院の松亭々と辛夷かな

松の緑　鉢植の百本松の緑かな

柳　使して柳も見えず蜀の道

緑日の晝も店出す柳かな





木の芽　畑に鶏多く棗の木の芽かな

藤　低き木に藤咲いて居る山路かな

畑打つて藤一棚も培ひぬ

山吹　傘さして山吹を折る小庭かな

山吹は春の名殘の一重かな

虎杖　虎杖やガンビ林の一部落

燒石に虎杖角を出しけり

木置場の坪も虎杖林かな

海苔

海苔の香や誰が袖が浦と故人の句

島海苔を太布のやうに疊みけり

燈臺の人も岩海苔掻く日かな



# 夏

## 時候

短夜

短夜や町を砲車の過ぐる音

短夜の大佛を鑄るたくみかな

飯島村は近き頃大火に罹りて焦土と化す

明易

明易き火焚きをり葉枯れ木の下に

涼し

晩涼を趁ふ徒に交る下山かな

海樓の涼しさ終ひの別れかな

膝と膝に月がさしたる涼しさよ

蟹とれば蝦も手に飛ぶ涼しさよ

七十二峰半は涼雲棚引ける

五月

門川に流れ藻絶えぬ五月かな

六月

起臥の神鳴月や峰の坊





旱

萍の澁色旱る日頃かな

虹のごと山夜明りす旱年

土用

土用芽の茶の木に蜘蛛の太皷かな

秋近

賣り値待つ繭の主や秋近き

## 天文

五月雨　寺による村の會議や五月雨

五月雨や鴉草ふむ水の中

水くゞる鳰見えずなりぬ五月雨

溫泉烟の田にも見ゆるや五月雨

夕立　夕立や夕貌棚の雫落つ

夕立雲立つ山や花漬の宿

森林帶沮洳に咲く花夕立ちて





薰風　舞殿や薰風畫の樂起る

北涯庵

大樹の下兒女鷄犬に風薰る

水月照る疾き魚も見ゆる風薰る

森の樓薰風に立つ鷺も見て

山寺へ上す籠鷄や風薰る

立山頂上

雪を渡りて又薰風の草花踏む

雷

停車場に雷を怖るゝ夜の人

雲の峰

上空にはやて吹くらん雲の峰

雲の峰葱の坊主の兀と立つ

雲の峰眞赤になりて入日かな

空をはさむ蟹死にをるや雲の峰

官命に伐る檜山あり雲の峰

錦川庵卽事





持山の果なし藪や雲の峰

阿蘇は何處

外輪山に立つ峰雲や阿蘇あらぬ

乘馬隊漁區見分や雲の峰

龍飛戻りの平沙や雲の峰壓す

馴るれども天水湯浴雲の峰

蘆間なる飢鳥鳴くや雲の峰

日盛

砲車過ぐる巷の塵や日の盛り

前鬼より後鬼に日さかる姿かな

掘る井戸の機嫌問ひ來ぬ日の盛

日盛や雨を思はぬ稗畑

夏の月　今頃を代馬戻る夏の月

黄雀風　鶴去つて黄雀風の吹く日かな





## 地理

清水　雲高く一片かげる清水かな

剣岩殘りて清水無かりけり

清水わる坊の一つや中尊寺

庵結ぶ開眼佛や庭清水

觸る木踏む草ヨナ立たずま一ト清水越

夏野　馬に乘る人を彼方に夏野かな

砲も過ぎしと敎ふ夏野の車道かな

島渡り明日はと望む山夏野
笹の中を植林の道を山夏野

夏山

倒れ木も多し百合咲く夏の山
鷺立てる沼田の上や夏の山
湖は一握の水夏三山の天





人事

松前渡り

海鳥の呼ぶ北門の渡りかな
蝦夷人の望む渡りの帆十分

衣更

人の國に來てぞ似つかぬ更衣
別荘の花園の花や更衣
分限者の己が繪像や更衣
烏鷺に似し客二人あり夏衣

袷　青物を買ふ女房の袷かな

祭　篝焚く二タ峰も漁村祭りかな

御祓　御祓して淺き流れや石光る

幟　我高く立てんとすなる幟かな

粽　粽師の古き都に住ひけり





蘭湯　蘭湯に浴し錦を着たりけり

薬草摘　薬草を摘み居れば園の孔雀鳴く

薬玉　薬玉やものつたへ來る女の童

夏断　夏断して佛の痩を忍びけり

清浄と夏書の一間塵もなし

雲晴れて解夏の鶯聞えけり

團扇　筆筒に團扇さしたる机かな

反古堆裏埋む疎懶の團扇かな

競渡　烏帽子着てさしづ顔なる競渡かな

單物　乳あらはに女房の單衣襟淺き



夏羽織　夏羽織一刀腰に醫師かな

梅干　梅干にすでに日蔭や一むしろ

干梅の紅見れば早雲

青簾　塔雛形あるこの宿や青簾

蚊遣　わが庵は蚊遣すべく又せざるべく

馬方の喧嘩も果て蚊遣かな

匂ひする園主が菊の蚊遣かな

打水　三尺の庭に水うつ桐一木

納涼　涼む子等床几舁き行く川の中

此頃の納涼芝居や電氣燈

丘の町下り果てゝ橋納涼かな

螢來しあとや蟬飛ぶ端納涼

明日渡る湖の眺めや端納涼





抱籠　抱籠や國事に忍ぶ京の宿

抱籠に團扇さゝれて翼かな

竹奴抱く心に脚婆思ふかな

瀧殿　瀧殿や窟の神も鎭りぬ

大原なる山べの瀧や殿作り

雲板を掛けし瀧殿楣間かな

雨乞　雨乞ひの下賤の顔も祈りけり

雨鬼風鬼祈りの風に問答かな

夏瘦　夏瘦の文長々と物しけり

掛香　掛香や派手な浴衣の京模様

掛香や舊府の染布色淡き

日傘　誰が日傘忘れある蜂屋音のして





蟲干　蟲干は風吹き通す座敷かな

蟲干や返す人亡き書一函

歸期も知らぬ主を待つて曝書かな

蟲干の寺に掃苔の供養かな

蟲つゞる文のさうなく束ねあり

晝寐　愕然として晝寐さめたる一人かな

水を買ふ頃や日毎の晝寐覺む

宿は橋を見下ろす景や午寐起

鵜飼　羽たゝきや縄に釣られし鵜のたけり

闇中に山ぞ峙つ鵜川かな

鵜つかひや忍冬咲いて畫の宿

川狩　我行くと誰知らぬ淵の夜振かな

避暑　避暑に來て君書を讀まず行李の書





沓ぬきに家鴨も來るや避暑の宿

削氷　削氷や鮓に乘る子にかしづきぬ

沖膾　島巡りして戻りなり沖膾

鮓　鮓米や白きが上の夜の露

高根より下りて日高し鮓の宿

心太　心太に月上りたる戸口かな

一行皆草苞置きぬ心太

水飯　水飯の水こぼしけり膳の上

水飯一椀冷酒半盞に僧を請ず

干飯　けふの日も庭木影落つ干飯かな

貯へて風入るゝ日や道明寺

乾飯の笊掻く音も夕かな



## 動物

時鳥　杜鵑臺に大なる月の上りけり

明き星傾く空や時鳥

安田氏一泊

寢殘れば月にやなりし時鳥

木置場の番屋の月や時鳥

シカタ荒れし風の名殘や時鳥

閑古鳥　噴火後の溫泉に住む家や閑古鳥

行々子　行々子葭も殘りて文庫かな

砂を踏む道しばし來しが行々子

凪ぐまでを吹く夕風や行々子

流れ藻も風濁りして行々子

葭切や飼屋近くに墓所選び

裏に導けば栴檀の風や行々子

葭切に臥龍の松の茶店かな



水鷄　水鷄來し夜明けて田水滿てるかな

啄木鳥　啄木鳥や行者の道の岩傳ひ

蝙蝠　蝙蝠や水車の精米上げに出て

金魚　金魚飼うて能の太夫の奢りかな

しだり尾の錦ぞ動く金魚かな

ながゝと幾日金魚の糞の恥

緣ばかりまはる金魚の尾切れかな

蛇の衣　古家や臼にかゝれる蛇の衣

幽叢に白く全たき蛇の衣

麥藁をきのふ積みしが蛇の衣

鷄叫びも蓬高さや蛇の衣

蟬　落ち蟬の砂に羽搏つ尙暑し

蟬涼し朴の廣葉に風の吹く





毛蟲桃伐らんとぞ思ふ蟬の聲

蚊　朝風に蚤蚊の跡をさましけり

蚊柱や鐘樓の方に草深し

蜘の子　蜘の子や親の袋を嚙んで居る

灯取蟲　楯圍ひして灯あるなり蛾の影も

螢

すべり落つる薄の中の螢かな

馬獨り忽と戻りぬ飛ぶ螢

灯あかき紙端に落る螢かな

鹽原

行く螢白雲洞の道を照らす

螢籠樒賣る家に吊しけり

葭村に落る流れや飛ぶ螢

蟇

萩の下葉の汚れたるに蟇の這出でつゝ





木香を焚くこの家の主蟇きらひ

蟇出るや上野の山の水たまり

塔の下蟇出でて九輪睨みけり

水馬

簀の中のゆるき流れや水馬

蘆の間の水泡につくや水馬

蛭

蓮池や蛭游ぎいでゝ深き水

子孑　子孑や　天水桶に　魚放つ



## 植物

桐の花　天領の　境に咲くや　桐の花

槐の花　山を　裏に槐の　花の宿りかな

合歡花　乳牛の　角も垂れたり　合歡の花

栗の花　照り雨や　茂りの中の　栗の花

栗の花　こぼれて居るや　神輿部屋

鬪ひし牛とりこめぬ栗の花

若葉

鶯に若葉嵐や井の頭

神事近き作り舞臺や楠若葉

夕鳥の貝吹く青葉若葉かな

飛乘りの駈を打ち過ぐ若葉かな

戸隱奥社卽事

飯綱より雲飛ぶ橡の若葉かな

山ぬけの水さゞら若葉逆木なる





燒山がくれすちよぼと若葉の螺峰のみ

卯の花

椿原に一休す

寛浚ふ人も卯の花露明り

夏木立

夏木立深うして見ゆる天王寺

坊に會す約を履み來ぬ夏木立

時明りす

厨丁の折る花のわり夏木立

木下闇　茨散て水の光りや木下闇

葉柳　辻能の班女が舞や夏柳

松落葉　葭の中に宮居の道や松落葉

池のほとり露佛あるなり松落葉

蝦夷船に備へし跡や松落葉

實櫻も地に印す松落葉かな



海邊行けば這ひ草咲いて松落葉

菖蒲　溫泉の屋根に菖蒲葺くなり有馬山

菖蒲太刀前髪の露滴たらん

樗の花　大利根の水守る宮や花樗

茨のちる水を覆うて樗かな

牡丹　山梔子歸る

驟雨來る別れの朝の牡丹かな

芥子の花　垂れ首の芥子の高さになりにけり

野に出れば芥子の散り端や鷺の飛ぶ

芥子咲くや園主の麥も渡り種

百合　百合の句に今の象潟思ふかな

夕顔　夕顔や柑子の葉越し白き見ゆ





撫子　撫子や高野の道の地藏堂

撫子や海の夜明の草の原

蓮　夏帽を吹きとばしたる蓮見かな

疾く起きて水車蹈む人や田の蓮

黒谷の松や蓮さく朝嵐

採蓮の歌童謠に聞く日かな

茨

香をさますタ風茨の野道かな

茨の香やなど墾かずと訪ふ心

花茨や里なづむ頃灰降りて

河骨

河骨も繪圖にかきけり干滿寺

苔の花

猿紐も花かと岩の苔の花

蓴

二つ池山中にある蓴かな





入らずの森跡はあらねど蓴かな

又た水を搏つ大鳥や蓴舟

蕗

鑛烟もほの匂ふ山や蕗の雨

夏草

鳶の栖みし木枯れを草の茂るなり

麥秋

街道に馬士の喧嘩や麥の秋

麥の風鄙の車に乘りにけり

麥の秋匈奴逼ると聞えたり✓

里心麥にふかれて戻るなり✓

南瓜

師の病よき頃南瓜煮たりけり

大穴を鴉の食ひし南瓜かな

瓜

瓜積んで朝舟著きぬ流れ山

芥子散るや瓜もむ時の夕風に

瓜食うて我も上るや觀音寺





藜

草莖をさしたる梢藜かな

いちご

乳鉢に紅すりつぶすいちごかな✓

夏大根

貧乏な青物店や夏大根

## 雜

舞臺峠は美濃飛驒の國境

國境の笹平ら鐵氣水煮えて





## 秋

### 時候

立秋　今朝の秋千里の馬を相しけり

悼木外

諏訪の水ハタと落ちたり秋立つて

### 朝寒

鹽原行

溫泉煙の朝の寒さや家鴨鳴く

藁積めば朝寒き里の冬に似る

うそ寒　うそ寒み車賣らるゝ途中かな

肌寒　夜半に著く船を上るや肌寒み

冷か　落し子の龍の冷たき斑かな

ひや〳〵と積木が上に海見ゆる

一宿して雨晴るる山ひや〳〵と

雲巖寺





冷やかに十境三井の名所かな

日記にすたまさかの敍景冷やかに

秋晴　烟吐く舟許りなり秋晴るゝ

秋日和舊友會の野外かな

近作を畫室に掛くる秋日影

秋晴て葭より高き黍見ゆる

鹽原行

秋日和狂ふ那須山颪かな

送別の爆竹鳴るや秋晴れて

行くべかりし舟遊思ふ秋の晴

裸湯の人猿が見る秋晴れて

夜寒

小角力が風呂の下焚く夜寒かな

居風呂に二人入りこむ夜寒かな

夜を寒み人語聞えて森の寺

鹽原行二句

下戸の黨膳を徹する夜寒かな





谷水の地底に鳴りて夜寒かな

點滴と夜寒の釜の鳴る音と

思ひの外客ある山の夜寒かな

十框病む平癒祈禱

俳魔して夜寒の病魔拂はせん

湖を見て夜越えになりし夜寒かな

鞠水館即事

寂然とをれと艶なる夜寒かな

燒跡も夜寒の橋の出商ひ

夜を寒み伽すれば乞ふに讀む書あり

夜長　下り二艘上り來ぬ夜の長さかな

鹽原行

寢る時の湯浴靜かに夜長かな

火も置かず獨居の人と夜長かな

楚子後槻布子を贈る

句を作る夜長に妻等縫ひにけん



秋暮　泣きやまぬ子に灯ともすや秋の暮

秋の夜　秋の夜や學業語る親の前

秋夕　竿昆布に秋夕浪のしぶきなき

暮秋　鞴踏む賑ひ過ぎて秋暮れぬ

冬近　宿の主人も一筆を乞ふ卽事

建て増しの槌かしましう冬隣る

川口の塞がる冬も隣りけり

短檠や冬を待つなる夜の蜘

九月盡　腹けそと背もなき鮎や九月盡





天文

初嵐　ことし掻けば枯るゝ漆や初嵐

秋風　秋風や道に這ひ出るいもの蔓

學問の稚子のすゝみや秋の風

鹽原行二句

秋風の溫泉宿のさびれ懐かしき

重疊の山夕榮えぬ秋の風

追善の芝居幟や秋の風

閑庭

栴檀の實の三ッ叉や秋の風

午後虚榮來る閑談

我を戀人といふ人淋し秋の風

果知らずの記のあとを來ぬ秋の風

野分

手負猪萩に息つく野分かな

抱き起す萩と吹かるゝ野分かな

ほこり立てゝ馬小走りに野分かな





罠なくて狐死にをる野分かな

瓜垣のつぶれめでたき野分かな

野分にもめて萩の咲き出でし

隣かけて大樹倒れし野分かな

山を出る日のくれ〳〵に野分かな

灯ともすや野分止む頃戻る船

燭足りし頃を御堂の野分かな

星月夜

吾庭や椎の覆へる星月夜

瓦燈口あかき見ゆるや星月夜

星月夜狼火にあらぬ稲妻す

秋雨

御下向關路の秋の雨に逢へり

かつたいに奇特の寺や秋の雨

秋雨や俵編む日の藁一駄

秋の雨笹青き上の平かな

山潰えし又の噂さや秋の雨

晴を鳴く鶯や足尾の秋時雨





稲妻

稲妻の嚇として傘を透すべく

斷食の水戀ふ夜半や稲光

風雲のときに稲妻しば〳〵す

稲妻に荻の音さへ無りけり

漸々と雲湧く方や稲妻す

海門を出れば稲妻の左右よりす

稲妻や芝滑らかに牧場雨

## 天の川

即　景

靜かさや燈臺の灯と天の川

## 月

公園の月や夜烏かすれ鳴く

誰人か月下に鞠の遊びかな

狼火待つ寄手の月の後陣かな

碧童庵即事二句

月のよきに主は何で籠り居る

藥ねつて主は月に背きけり





横に刷く雲の旗手の月夜かな

堀止めの運河の月や通ふ汐

暴動の後に又なき月夜かな

穂芒の上飛ぶ月の狐かな

月前に高き烟や市の空

一つ家の月枯枝にかゝりけり

要害臺眞上の月になりにけり

町に出ても白楊高し盆の月

西山々莊にて

月見るも斯君斯老の二人かな

飲み水を運ぶ月夜の漁村かな

川越えて海邊の月に寒かりぬ

安積中學校運動會五句の中

五十鈴湖畔の明月といふ遊びかな

明月のともし火遠し由井が濱

漕ぎ出でゝ月見の船や湖半✓

月の雨靜かに雨を聞く夜かな✓



後の月

荒削り羯摩が鬼の十三夜

任地去る人の妻子や後の月

淋し寒し出羽の清水後の月

こたび下れば上らぬや後の月

主振り茶も設けゝり後の月

出でゝ伏水船まだある後の月

隱栖は成りしかど短命や後の月

三日月

三日月に淋しきものや船よばひ

ひもらぎの莚の露や三日の月

藻を掻いて暮るゝ蜑あり三日の月

三日月に川一筋や新墾田

貝掘りの戻る濡身や三日の月

糧を載せてひそかなる舟や三日の月

佐渡の句の三日月の槍にかゝれけり

霧

霧こめて恵心寺見えぬ朝かな

燈臺のともる港や霧の中





樓門に幕打て霧の晴るゝなり

海樓の松薄霧に殘る月

霧立つや大沼近き宮柱

磐梯の霧こめて暮色大いなり

異れる山の樣見る霧晴れて

神業の晴れずの霧や山の湖

鳥海山頂本社の宮司某氏一句を乞ふ

雲霧や風は神よばひしてや鳴る

霧晴るゝ向つ峰劃す大河かな

## 露

ほの明けに花白き木や露の原

露深き草の中來ぬ塔の下

八十神の御裳裾川や露時雨

雜草に南瓜の花や露の中

高黍の野路になりけり露の降る

藁覆ふ藻塚匂ふや露の中

露の草碑埋りしこのあたり

脚高き木々の立てるや露の原





水菊の花や慈覺の露の降る

露に來て繪天井見る小寺かな

白山溫泉

山谷めせし膝皿や露しとゞ

山房の夕露や楡の沙明り

剃刀をいたゞきに行く露時雨

## 秋の空

塔に上る暗きを出でゝ秋の空

幌武者の幌の淺黄や秋の空

山莊の眺望御記や秋の空

秋の空虎落の上を行く蜻蛉

此處には湖舟多く繫れり

日泊りせしを上るや秋の空

門祓ひ疫絶えし後の秋の空

秋の雲　見えぬ高根そなたぞと思ふ秋の雲

隔て住む心言ひやりぬ秋の雲





## 地理

秋の山　頂に湖水ありといふ秋の山

墓と見えて十字架立つる秋の山

牧人に日出る方や秋の峯

遠のきし雲夕榮えす秋の山

雲こめし中や雨降る秋の山

秋の水　藻を刈りて泥流れ去りつ秋の水

秋の水冷々として鐘の下

花野　川上の水静かなる花野かな

芒絶て茅の穂交りに花野かな

芒谷下りて果なき花野かな

領境牧場も置かず花野かな

初汐　碁布の島初汐浪を上ぐるかな



人事

去來忌　去來忌に卯七の事も忘れずよ

子規忌　天下の句見まもりおはす忌日かな

踊　月出でゝ鬼もあらはに踊かな

燈籠　庭暗し燈籠に物ぞ襲ふ思ひ

大船の舳に魂を呼ぶ燈籠かな

この海の供養にともす燈籠かな

閑談の燈籠の灯の細りけり

夜仕舞の店に殘れる燈籠かな

墓參

櫨寺の墓にも參るゆかりかな

むら薄似し墓あるに詣りけり

草ぬいて早や暮るゝ日の墓參かな

大文字

大文字や北山道の草の原

門跡に我も端居や大文字

三井詣

花をさす裸佛や三井詣

行水名殘

癯病みし人も行水名殘かな

五位鳴いてそゞろ行水名殘かな

新酒

この願ひ新酒の升目寛うせよ

草の戸に辰馬が新酒匂ひけり

爐の側に信夫女と新酒かな

子規居士の舊事を偲ぶ

故人こゝに在りし遺物と新酒かな

濁酒

どぶろくの境界發句の天下かな

貧の鬚伸びて濁酒を酌みにけり

どぶろくのあるじを以て我れ居らん

柚味噌

柚味噌會そも十年の昔かな





話頭柚味噌に及べば主經營す

大饗のきのふ忘れて柚味噌かな

取りも入れず五倍子干す宿の柚味噌かな

澀搗

澀紙や古りて用なき桑の下

猿に似るモンペ穿きけり澀を搗く

澀の杵置くともなしに戸口かな

新蕎麥

新蕎麥を打つ一棒のたはれかな

貧の友娶る一人や蕎麥の秋

新蕎麥に句に酒に論に責らるゝ

即事

蕎麥うつや月彷彿と靄の中

新蕎麥や植林の山中の酒

砧

小さい子砧しどろに打ちもやめず

たはれ女の槌かくしたる砧かな。

鹽原行





カルサンの女が打つや藁砧

蝕める機もあり古き砧かな

再遊の宿も同じき砧かな

豪家なるジョンバの砧また聞かん

角力

負力士髻土に汚れけり

引分けて鼻血わりなき角力かな

花薄歸參かなはぬ相撲かな。

花火　遠花火音して何もなかりけり

海の月花火彩どる美しき

遊船の舳に艫に芒花火かな

秋扇　硯得しに君待て扇置く心

捨團扇　置き重さぬ蘆邊眞白の團扇かな

新綿　綿の木にしぐれかけたり娶そしり





綿くはぬ古びゆかしき手繰かな

綿とりし野面になりぬ鵙飛ぶ

綿ざねをはかす草蘆の竈かな

日は斜木綿取るべき野面かな

大根蒔　大根蒔く日より鴉を憎みけり

秋の蛾　船宿にしばしまろねや秋の蚊帳

蚊帳の果妻亡き君に思ひ走す

藥やめしも蚊帳の別れの二三日

君等我等机定めつ蚊帳の果

櫂の遠音雁かとも蚊帳果てし夜や

案山子

我笠と我蓑を着せて案山子かな

小藩分立由利一郡の案山子かな

鳴子

澤の上縄引きたるゝ鳴子かな

學僧の往來の道の鳴子かな





樽さげて聟が行きやるを鳴る鳴子

芋煮えて天地靜に鳴子かな

馬遠く鳥高き野の鳴子かな

添水

きいと鳴る三つの添水の遲速かな

寺の床人の蹈むよに添水かな

溫泉の里の捨湯も落て添水かな

初獵

鳴走る田水獵期の初めかな

海贏打　海贏打やゝ十五の大人交りをる

　　與太郎に示す

　　虎の子の海贏を汝が袂かな。

鹿笛　村近く鹿笛吹いて過ぐるかな

漆掻　谷深うまこと一人や漆掻





漆掻いて夕日さしけり山の池

翁住んで壺の漆を干しにけり

枝々の細きも漆かきにけり

古桑に交る漆も掻きにけり

漆かく山に通草の赤きかな

諸爪のように掻き捨てし漆かな

崩築　米をつく舟もすさまし崩れ築。

天長節　團欒や民　喜びの菊の酒

新米　人丸も五穀の神と今年米

高きに上る　高きに上る怡々として父老かな

菊折て高きに上る旅情かな

猿酒　猿酒や爐灰に埋む壺の底



## 動物

鹿

村近く鹿の出て啼く端山かな

晝過や鳥居の前に鹿二つ

老と見ゆる鹿が鳴きけりまのあたり

手向山の紅葉に鹿を愛すかな

祭の灯あかきに鹿の遠音かな

山房の著作すゝむや鹿の聲

奈良

鹿群れて出る野分の旦かな

鹿窪も雪早き年の刈田かな

鹿を呼ぶ頃の汐照り神凪ぎに

雁

母衣かけて車に雁を聞く夜かな

海近く雁の下り居る田の面かな

園の菊葉廣に雁の糞白し

森蔭になり行く雁の鳴く音かな

稲村に番雁人を寄せぬなり

雁鳴くや海見ゆる窓を閉しねて





門裸な家となり雁下りる沼

渡鳥

づく〳〵と鳴く小鳥來る梢かな

大風に傷みし樹々や渡り鳥

鳥渡る博物館の林かな

椎拾ふ子の朝早し渡り鳥

雲早き空になりけり鳥渡る

夜晴せし日のきら〳〵や渡り鳥

多度山の低き彼方や渡り鳥

表のぼりする山裾や渡り鳥
渡り鳥安積瓢にしば〳〵す
駒耀りの物のきほひや渡り鳥
山入口朴の葉風や渡り鳥

伊藤氏別墅卽景

鳥海を肩ぬぎし雲や渡り鳥
岬めぐりして知るや鳥の渡り筋
この瀨埋めて彼の山開く渡り鳥



啄木鳥　啄木鳥や山下り勝の庵の主

鶉　穂の高さ黍に鶉の飛び立ちぬ。
　　薏苡の高きが下の鶉かな。

鴫　銃の音鴫と小鳥と立ちにけり
　　鴫打ちの煙飛びけり江の日和

百舌鳥　散りすさぶ雜木紅葉や百舌鳥を賣る。

山の邊に豆干す丘や百舌鳥の聲

百舌鳥鳴くや醒醐の道の菊の村

葉白く變る草あり百舌鳥の贄

片目開いて人嚙む百舌鳥の囮かな

途中吟

家處々に百舌鳥木移りし高鳴きす

山寨の道到り難し里の百舌鳥

燕歸る

いぶしたる爐上の燕歸りけり。





湖のしぐれに歸る燕かな。

養生に殘らにやならぬ行く燕

燕去んで蘆葦雁影に靜かなる

燕去んで部屋〳〵ともす夜となりぬ

鰯

汐焚くと鰯ひくとや須摩の蜑。

鰯引く外浦に出るや芒山

鯉

酒拭くに鯉の粟のこぼれかな

鰡

建網の十日の月や鰡の飛ぶ

鰡の飛ぶ夕潮の眞ッ平かな

鰡の飛ぶ江尻の汐の高さかな

鰡飛んで船の往來も杜絶えけり

蓑蟲

蓑蟲を養ふの記のあるじかな

蓑蟲や五倍子干す宿の軒端より

蓑蟲の木瓜は枯木になりにけり



蚯蚓鳴

蚯蚓鳴いて夜半の月落つ手水鉢

落鮎

句劣る蕪村拾遺や秋の鮎

よき歌も言ひ古されぬ秋の鮎

旅心定まるや秋の鮎の頃

澀鮎や石拂ひしに出水して

江鮭

貢せぬ國の淋びしき江鮭

堅田より翁の文や江鮭

源五郎鮒　四郎三郎　鯇九郎

蜩

蜩や兵村にある牛牧場

蜩や道程を聞く二里三里

蜩や浦人知らぬ崖崩れ

蜻蛉

赤阪も田舎になりて蜻蛉かな

蜻蛉や西日静かに稲莚





蜻蛉や日限り地蔵の八つ下り

蜻蛉や線香干して鳥羽の里

兵營の前廣々と蜻蛉かな

雨に泊れば雨は晴れたる蜻蛉かな

逆浪の江に夕空の蜻蛉かな

岩代二本松

丘隔つ町二節の蜻蛉かな

待つ人に裾野にあへり夕蜻蛉

舟遊ぶ飛驒古川や夕蜻蛉

紅毛の帆船著きけり飛ぶ蜻蛉

赤蜻蛉

から松は淋しき木なり赤蜻蛉

むれ立ちて穂の飛ぶ草や赤蜻蛉

蟷螂

蟷螂のほむらさめたる芙蓉かな

蟷螂や秋行く道に現はるゝ

蟷螂や鉢の木古き南天に

澁色の蟷螂に櫻落葉かな





蟲

骨立舍

鳴きやまぬ蟲に句作の遲速かな

鹽原行

溫泉烟に灯ほのかや蟲の聲

蟲の句を案ずる旅の恙かな

夜ながら盥すゝぎや蟲の聲

石段の高きのぼりぬ蟲の聲

魔がさすといふ野日高しちゝろ蟲

蟲鳴くや庵の樹と見ゆ寺の杉

木の葉そよぐ月代も見ゆ蟲の聲

秋の蚊

殘る蚊もはたとなき夜や燭の風

繭を積む後ろより殘る蚊の出る

鯊釣

友鯊のつぎ食ふ汐になりけり

螽

螽燒いて夕にくれる翁かな





螽飛ぶ草に蟷螂じつとして

田鼠の鳴く音も螽靜まれば

螽とる老を見ぬ日のつもりけり

雀蛤となる

雀蛤となるべきちぎりもぎりかな

## 植物

木犀　木犀に薪積みけり二尊院

常陸西山々莊

木犀や隱栖に國事聞ゆ時

紅葉　紅葉摺うつや高雄の這入口

蘆高う隔てゝ里の紅葉かな

城山の蹴落しの谷や夕紅葉

醍醐邊川水を照る紅葉かな





角枝の火木に燃ゆる紅葉かな

鹽原行

畑墾く遠き木ぬれの紅葉かな

奇岩出づ天狗の鼻の紅葉かな

山姫の岩も鐫りけんむら紅葉

猿茶屋に大枝挿せし紅葉かな

檻の前猿が散らせし紅葉かな

溫泉の神の幟も赤しむら紅葉

轆轤挽く家や紅葉を鉢に植し

棚田見えて紅葉に遠き處かな

朴落葉ぬるで紅葉の谷間かな

黒木積で紅葉が中や一軒家

水に嗽ぎ湯に枕して紅葉かな

裸湯に斜日の紅葉映じけり

貝石に紅葉とり散らす土産かな

丸盆の木目は紅葉重ねかな

石を焚く里に宮居の紅葉かな

もみづるや平家の寺の櫨一木





櫻紅葉なるべし峰に社見ゆ

阿賀川も紅葉も下に見ゆるなり

山紅葉縣の牧場通りけり

虚静庵卽事

畑廣し藏立つあたり散る紅葉

裏山のけむれる此方紅葉かな

最上川仙人澤

檜山と峙して滿山紅葉かな

本合海卽景

鍬形の流れに星座紅葉かな

汪洋館卽事

瀧を下に間伐りせし谷紅葉かな

峰渡りの足溜り一寺紅葉かな

柿紅葉

落合のほとりの村や柿紅葉。

屋根見ゆる凹地の寺や柿紅葉。

木の間より正倉院の柿紅葉

草紅葉

葉散ても みづる草の堤かな。





鷄の尾のしだれの草も紅葉かな。

菜畑の中の堤や草紅葉

柳散る

柳散て料理も淋し忍川。

ひゝらぎの枯葉も落る散る柳

散る柳古簾かけたる家居かな

柳散て鐵柵立てる札所かな

灰捨てし芥の上や散る柳

菊を一廓にして厩あり散る柳

咲き絶えし薔薇寄せあるに散る柳

梨

十日路の海渡り來ぬ梨の味

銀杏

寺のある川隈銀杏黄ばみ見ゆ

梓弓比企が谷の銀杏黄なるかな

會下の友想へば銀杏黄落す

柿

柿はちぎり棄は多く捨ひけり

山園む歸臥の天地や柿の秋

某林務官に示す

山踏の倒れ木もなき柿の秋

柿の村城遠卷の藪も見ゆ

柚

蠅帳に今あるものや柚二つ

栗

圓卓や栗飯に呼ぶ弟あり

栗燒いて渡世とす南大門の市

毬栗の檜皮にかゝる社かな

栗綴る妹見ればあかき行燈かな

彌五郎坂を越ゆ

坂を下りて左右に藪あり栗落つる

此庭や芝こまやかに栗干しぬ

さゝやかな鑛山あるや栗拾ひ

牧原の隅通ひ路や栗拾ひ

桐兒に與ふ

三つ栗の其の落葉の一つかや





栗

栗の穗を摘みおくれたる野分かな

唐黍

草伸びて唐黍の穗に出るなり

栴檀の實

栴檀の實を喰ひこぼす鴉かな

木の實

掌上に天果と見ゆる木の實かな

少年の木の實のホ句に振ひけり

伊豫宇和島天赦園卽事

藤二棚末枯れて木の實散るしきり

木槿

墓多き小寺の垣や花木槿

木槿咲いて祭も過ぎぬ野の小家

稻村の中に地藏の木槿かな

木槿さく畑の徑や木幡山

捨飼ひに牛肥ゆる里の木槿かな

七浦の祭の木槿咲きにけり





鳥居ある漁村の砂に木槿かな

貝殼の道と聞き來て木槿かな

松大樹ある學校や木槿垣

寺あれば池ある里や花木槿

清澄を越え來し里や花木槿

草刈れば木槿花さく草場かな

芭蕉

古里に唐門あるや芭蕉寺

裏門の塾に破れ葉の芭蕉かな

宿乞ひし寺や芭蕉に目覺めけり

不卽不離の處に庵の芭蕉かな

鷄頭

お長屋や黃に紅に鷄頭花

雨彼岸過ぎし物日の鷄頭かな

鷄頭に鼠出づ垣つぶれして

芙蓉

晝過ぎつ芙蓉の下に鷄すくむ

籌木は皆伐られけり芙蓉咲く

草とつて芙蓉明かになりにけり

水戸好文亭

沓の跡芙蓉の下に印すらん

城石垣一片移す庭芙蓉

菊

爭ひは白菊わかつ黃菊かな

鹽原行二句

一部落那須野の菊の痩せにけり

關跡に木挽が家や菊の花

未だ山を離れず菊を作る里

米澤市中卽事

山桑の木高さや菊も作り捨つ

菊の日を雪に忘れずの溫泉となりぬ

三菊の名ある縣の一長者

僧の招き我を致せし菊見かな

關跡に地藏据ゑけり菊の秋

萩

山萩の馬にくはれてまばらなり





三日月や此頃萩の咲きこぼれ

晴々と萩憐むや天龍寺

萍に萩のこぼれや里の池

成東入道山

松深く萩の徑の盡きずある

朝顏　草庵

朝顏の出水を渡る鼠かな

桔梗

十哲の像と桔梗と薄かな

桔梗は畫卷の縦に畫きけり

芝青き中に咲き立つ桔梗かな

銀屏の前桔梗の挿されけり

曼珠沙華

木曾を出て伊吹日和や曼珠沙華

法窟の大破に泣くや曼珠沙華

曼珠沙華咲き絶ぬなり早雲

愁ひつゝ旅の日數や曼珠沙華





川沿や芒が中の曼珠沙華

藁干す家に摘み來ぬ曼珠沙華

須磨寺や松が根に咲く曼珠沙華

稗

鹽原行

稗殼の垣結ふ里の溫泉かな

芒

鹿の糞累々として花芒

この道の富士になり行く芒かな

同門の葬儀に參る薄かな

挿しあるを流人のよみし薄かな

鹽原行

果なしの野に立つ薄日暮れけり

秋海棠蔓りて芒無りけり

江の島に茫々として芒かな

ほち〳〵と葭も芒も蓼の穂も

鳥居ある方に上れば薄かな

遊女屋のありて舟つく花芒





志士祭る今月今日の芒かな

里つゞき松と芒に家居かな

九面（つら）は芒の里やむら〳〵と

水筋の横瀬に落つやむら芒

牽く見れば馬買はまくす花芒

會津熱鹽溫泉卽景

遊園に園ひし山の芒かな

芒四方に高し澁とる家の空

海を隔てゝ見し方に來ぬ花芒

芒

添へて豆の木掛けぬ風構

女郎花

休らへば手折りもぞする女郎花

勿來關跡

松の外女郎花咲く山にして

野菊

撫し子に往來日を經し野菊かな

日待の日手折り持ちける野菊かな

馬を見に行く野の芒野菊かな





憂さ晴れてそゞろに行けば野菊かな

雁來紅

誰が植ゑて雁來紅や籠り堂

蘭

香墨

凋落す双樹の下に蘭のあり

柘榴

裏町に住んで柘榴の一木かな

烏瓜　堤の木ひよろと立つなり烏瓜。

蘆の花　蜆掘る舟静かさや蘆の花。

行徳の里は蘆の穂がくれかな。

水馬をる静かさや蘆の花

砂よけのほとり穂蘆のむらくと

某　庵

無花果のかげに白きは穂蘆かな

この道の三つ渡る川や蘆の花



穂蘆出て寒風山を背ろにす

蕎麥花　蕎麥白き道すがらなり觀音寺。

淋しさも不時の歸省や蕎麥の花

本降りになるや首途の蕎麥白き

末枯　末枯に錦木立てる門邊かな

末枯の紅にして蓼あるべし

末枯の南瓜一つや庵の畑。

鹽原行

末枯に燒木の埒の廣さかな

末枯の見通しの家壞ちけり

末枯の川原蓬や蛇出る

頬白か一羽淋しう末枯るゝ

末枯に斑なる鹿毛の子馬かな

會津城

末枯の漆落葉を踏み行きぬ

境木の築地になりぬ末枯れて





末枯れて道迷ふ湖面いや照りて

芋

香墨居

出水引いて芋も肥えけり裏廻り

麻昔の爲に其の病魔を叱す

句德無邊大いに芋を食ふべし

葉芋高き宿にとまるや晴三日

山中に句境開けて芋高し

唐辛子　さかしらに蕃椒くふ酒機嫌

一筵唐辛子干す戸口かな

一年を妻の藏めし唐辛子

鳴瀧や植木が中の蕃椒

瓢　吐せども酒まだ濁る瓢かな

糸瓜　棚作り藁屋の外の糸瓜かな





掛煙草　窓高き梁の日影や掛煙草

黍　日西にいづれかみのる黍と粟

黍の穂はきのふや伐りし小鳥網

稲　道端に刈り上げて稲のよごれたる

水害のまだ青い稲を刈つて居る

稲刈るや田舟押し入るゝ泥深み

稲刈て鵜の首見ゆる餌飼かな

掛稻のつぶれも見えて川原かな。

落穗　藁束を括る小首の一穗かな。

豐かなる年の落穗を祝ひけり。

草花　草花に大石据わる茶店かな

草花や湖の水つく通ひ路

月草　まだ据ゑぬ庭石のわり月草に





鳳仙花　紙漉きの戀に咲きけり鳳仙花。

蓼花　蓼の花草末枯れて水白し。

料理屋に隣れば赤き穗蓼かな

菌　さきんぜし人を憎むや菌狩。

菌狩やきのふの雨の小松山。

屯して烟上げゝり菌山。

昆陽みぞろ茸山戻りたそがるゝ

落栗を拾ひ茸を採らまくす





## 雜

愚庵十二勝の内棗子逕

長い棗圓い棗も熟しけり

森の中に出水押し行く秋の雲

嘯月壇

物干に月一痕の夜半かな

錦楓崖

僧僧を送り出で、紅葉夕日なり

古口といふ子規子がひさき宿と記せし所なり